

## <新刊紹介>小林裕子他編『幸田文の世界』

著者	吉田 恵美子
雑誌名	日本文学誌要
巻	59
ページ	101-101
発行年	1999-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020057">http://hdl.handle.net/10114/00020057</a>

小林裕子他編

## 『幸田文の世界』

吉田 恵美子

正直な所、現在何故幸田文なのかという気持ちが無かったわけではない。この論集でその気持ちに比較的近かったのは武田泰淳らによる群像の合評と上林暁と本多秋五の文芸時評である。これらは幸田文学の持つ見事に賛嘆しつつ、その一方でなにかの疑問を呈している。彼らの文学観から見ればさもありなんとも思ひ、本多秋五が「そういういわば根付けの美学に感覚を」とき澄ませている間に、現代文学はなにか重大なものをとり逃がし、うまうまとシテヤラレてしまうのではないか、という不安が残る。」と書かずにいらなかったのが良く分かるような気がした。これらの文章をも収録しているところに編纂者たちの見識があると言えよう。しかしその一方で、幸田文の文学は「感覚ばかりでびっしり埋めら

れていながら、人間の内部と外部とが立体的につかまれている、手ごたえ確かな小説である。」と本多秋五に書かせずにおかないものを持っていた。言葉が実質を失って衰弱しつつある現代文学の中にあつて、幸田文の言葉は少なくともずっしりと重い実質をもつて読者に迫ってくるのは事実だ。それが文学離れの傾向の強い現在にあつて多くの読者に読まれ続けている理由であろう。

この問題について示唆に富むものをあげると、清水良典は文の特質が大「文学」ではなく「無知で幼稚な子供・娘」としての徹底した自覚から「台処」を居場所として「徒然なるままに」「よしなしごとをそこはかとなく書きつけ」た所にあると指摘し、また父露伴について三十八歳にして小説の創作を断念せざるを得なかった文学者で、鬱然たる考証や学究が実は本質的な欠損と不在の代償としてあつたと指摘しているが、文を文たらしめた教育が実はそのような父露伴によつてなされたことは彼女の感性や考え方の質を考える上できわめて有効であろう。勝又浩は『崩れ』から受けた衝撃から出発して、文が幸田家の三つ栗の真ん中であるために嘗めた辛酸を指摘し、徹底した

強者露伴と徹底した弱者であつた夫との両極往還の体験を通して「自分の理解や力を越えた存在への恐れのようなものがのこつたのではないだろうか。そんなふうに想像してみても、私はやっと『木』や『崩れ』の仕事の意味が納得できるように思う。」と書いている。その根幹にこのようなものが潜んでいることを知って始めて文を文学へ突き動かした核をとらえることが出来るのである。その核が存在することで文学たり得る核を。小林裕子の『流れる』の分析は幸田文の独特な文体が身体感覚との緊密な関係で生み出される機微を具体的に分析し、そこにある価値意識を腑分けして興味深い。

掲載されている文章の多くが『崩れ』に触れているのは、文を突き動かしていた核がより強力に機能していて読むものをとらえるからであろう。その意味ではこの本は『崩れ』から逆算して何故現在幸田文かと、その文学の全体を検証していく契機にもなると思われる。

(よしだ えみこ・通教部講師)

▽一九九八年十月・翰林書房・二四〇〇円

△編者＝文学部講師・他